

## 活況の日本線 台湾航空会社が狙う次の一手



林 哲平

日本へのインバウンドの風に乗って、台湾の航空業界が活況を呈している。就航路線は東京や大阪から地方都市にも広がるが、「台湾からの送客は天井に近い」との声もある。気鋭の「スターラックス航空」に戦略を聞いた。

スターラックスは2020年に日本に初就航。東南アジアや北米にも飛ばす中、11路線（25年3月時点）で平均搭乗率89%の日本線が稼ぎ頭だ。張国焯会長は23年に「日本線は飛ばせば飛ばすほどもうかる」と発言。24年の最終（当期）利益は前年比8.9倍の約13億台湾ドル（約57億円）だった。日本線を急拡大する台湾の格安航空会社（LCC）のタイガーエアは25年の春節（旧正月）に平均12・8カ月分のボーナスを従業員に支給したことが話題になった。台湾の日本旅行熱が、この好調を支えているのはいうまでもない。24年の訪日台湾人客は約604万人。台湾人の4人に1人が訪れた計算だ。スターラックスの劉允富（りゅういんふ）・最高戦略責任者は「旅行者は」主要な観光地だけでなく、地方を含め

た日本の至る所を見て回りたい。そのために移動時間を短縮できる、便利なダイヤの便が好まれる傾向が強まっている」と話す。

日本の知事らは相次いで訪台し、路線誘致を訴える。ラプコールを受ける航空会社が重視する点は何か。劉氏が挙げるのは旅客需要に加えて、空港の受け入れ能力だ。新型コロナ禍以降、給油などの地上業務職員の不足は深刻で、飛ばしたくても断念せざるを得ないケースがある。例えば青森は就航を強く希望する候補地の一つだが、保安検査要員が足りず実現していないという。少子化が進む自治体単独での解決は難しく、国の取り組みが求められそうだ。

活況の先を見すえた動きもある。スターラックスは日本線の利用が円安の弱まりなどで26年には徐々に調整に入ると見て、現在1割にとどまる日本人客の増加を目指す。機内食や客室乗務員のサービスを通じて日本的な要素を増やし、「我が家に帰ったような雰囲気作りを進める」（劉氏）。

国際航空路線の多様化は、インバウンド客の集中と観光地の負担を緩和する可能性もある。旅行やビジネスを通じて人的交流が増えることで、日台関係がさらに強固なものになることを期待したい。